

理数科通信

岩手県立水沢高等学校
第10号 令和4年11月25日発行

出前授業③

11月15日(火)に今年度3回目の出前授業が本校の大会議室を会場に行われました。講師として東京電力ホールディングス株式会社の職員4名をお迎えしました。2年理数科生徒と1年生希望生徒の計28名が参加しました。始めに福島復興本社の取り組みについて説明があり、東北地方太平洋沖地震による福島第一原子力発電所事故の様子と廃炉作業の進捗状況について詳しい説明を受けました。その後、水処理計画グループ



に所属している渡邊さんから自身の仕事内容について等のお話がありました。渡邊さんは現在入社4年目で、震災当時は檜葉町の中学2年生だったとのことでした。震災後の環境回復に関わりたいという強い気持ちから東京電力に就職したとのこと。現在は得意な化学を活かし、汚染水処理に携わっているそうです。渡邊さんの一日の仕事の流れや、仕事のやりがいなどを聞いて、生徒は進路についての視野も広げることができまし



た。次に、廃炉コミュニケーションセンター所属である吉崎さんからお話をいただきました。吉崎さんは、大熊町出身入社十数年であり震災当時は小さなお子さんと避難生活をしながら東京電力に勤めていたとのこと。現在は原子力発電所の情報誌「はいろみち」の編集長であり、廃炉作業の進捗と復興の様子を地域住民の方々にお知らせしています。危険な場所にも防護服を着用し実際に目で見て、直接人に会って取材にあたっていて、写真も自分で撮影し、風景が事故前のふるさとの様子に戻っていくことが嬉しいと語っていました。

今回来校
された職員

4名は全員福島県出身で実際に廃炉作業に携わっている方々であり、生徒の様々な質問に丁寧に答えてくださいました。生徒は震災、復興、エネルギー、放射線など様々な知識を得られたとともに、実際に働いている人の思いを感じる貴重な時間とすることができました。



【生徒の感想より】

①出前授業に参加すること自体が初だったが、授業では聞くことができないような話を聞いて良かった。東日本大震災のときに原子力発電所で事故が起こったのは知っていたが、どのようにしてそれが起きたのか、その後どうなっているかは知らなかった。防護服を着なくても入れるほど、作業が進んでいる区域があることに驚いた。完全防備で作業し、まだまだ危険なイメージを持っていたが、今回の研修でその考えを改めることができた。



②今まで原子力発電所の事故は被害が大きく、危険だという固定概念がありました。しかし、今回の出前授業で福島では廃炉作業など安全性を高めるために日々努力していることを知り、自分は一部しか見えていなかったのだと実感しました。あの日から着々と復興が進んでいる様子を見て、働き手の試行錯誤が伝わってきました。一人一人の作業内容は異なるけど目的は一緒であるということを知り、感動しました。

③今回の研修で原発事故が実際どのようなものだったのかを改めて知ることができました。今回来てくださった方は自分にできることはないかと考えて、今の仕事に就いたと言っていてすばらしいと思いました。また、広報の仕事は、今までも原発の影響を受けている人たちに希望を与えてくれるような記事を作っていて、カッコいいと思いました。自分にも何かできることはないかと考えることは、今後の自分の将来のためにも大切な事なのではないかと思いました。

④福島第一原子力発電所について、今までニュースなどで原発の被害にあった地域の人々の声を知る機会はたくさんあったが、東京電力の社員さんたちの声を知る機会は少なかったので、とても興味深いものでした。ALPS 処理水の処理問題や廃炉作業など、画像や動画などを見て、自分が思っていたよりも進んでいて、安全に行われているのだと知って驚きました。また、電力会社と言っても、電気を作るだけでなく、様々な仕事があって、自分の進路の参考にもなりました。

⑤10年以上も前に起こった原子力発電所の事故によってまだ多くの方が避難しているという事実を改めて知り、放射能が与える影響について詳しく知ることができて良かったです。帰還困難区域が大分解除され、普通に住むことのできる場所が増えたのは、東京電力のみなさんなど、多くの方々のおかげだと強く感じました。事故当時の記憶は薄らいできましたが、震災のことを覚えている世代の一人として、小さい子たちに伝えていきたいと思いました。